



山形市の里山



山形市では、山形市周辺の里山を中心に自然環境調査を実施しています。調査結果は、市のホームページでも調べることができます。

①西部丘陵一帯

白鷹山を中心に県民の森や少年自然の家等があり、環境学習が盛んです。マダラナニワトンボをはじめ、他地域で減少傾向にあるトンボ類が安定して発生していることが確認されています。また、大平沼などの湿地帯には、ミズバショウやザゼンソウの群落残り、早春にはたくさんの市民が訪れます。中でも、ユキツバキは東北から北陸にかけての日本海側の豪雪地帯に分布するもので、白鷹山地はその最も東側に位置する分布地です。



ユキツバキ



マダラナニワトンボ



オオルリハムシ



ミズバショウの群落

②西蔵王・蔵王

概ね標高600m以上の山岳地で、ほとんどが蔵王国定公園に指定されています。多様な生態系が確保されており、市内では最も自然度の高い地域となっている一方、人の活動に敏感で、容易に影響を受けやすいことから、十分な環境への配慮が必要です。



ミヤマウグイスカグラ



フシグロセンノウ



オオヤマザクラ 市民写真作品



ザウアザミ

③高瀬・山寺

高瀬地区には、国のレッドデータブックの中で絶滅の恐れのある地域個体群に位置付けられているハナカジカが生息しています。ハナカジカは氷河時代の生き残りとして、水温が18度以下の北海道・東北の清流に生息する生き物です。地球温暖化や幹線工事、森林伐採などにより、近年減少が著しく、山形県内でも生息地は数か所になっています。また、山寺地区においては、ウラジャノメを筆頭に、貴重な昆虫類が多く確認されます。



ハナカジカ



ウラジャノメ



ベニバナ畑

④盃山～唐松観音



アベマキ林

盃山、愛宕山、滑川等の山麓帯では、平地に接する西から南向きの温暖な斜面に限って、北限の分布地と見られる暖地性のアベマキ林が発達しています。それは、山形盆地が温度気候的には暖温帯に属しており、暖地性植物の生育が許される環境下にあることの証しだとされています。

この辺り一帯は、国蝶オオムラサキをはじめとし、アベマキを主食とするシジミチョウなどの蝶が92種類も生息する国内でも有数の蝶の宝庫です。



アベマキの葉と実



オオムラサキの♂(左)と♀(右)



クロミドリシジミ

⑤千歳山から東部一帯

市民のシンボルである千歳山のアカマツ林をはじめとして、蔵王ダム周辺のミズナラ・ブナまで豊かな植物群落を形成しています。また、ヒメサユリなど、国・県のレッドデータ分国指定されている植物や昆虫も生息しています。



ヒメサユリ



アカマツ林とヒメサユリ

2 里山は自然の宝庫

65%は山岳丘陵帯

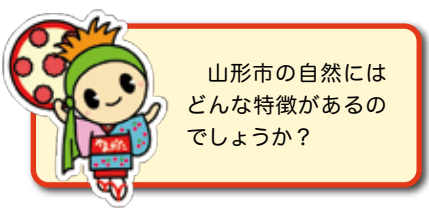
山形市は、県内陸部山形盆地の東南部に位置し、市域の65%が山岳丘陵帯からなっており、地形的には、奥羽山脈、山形盆地、西部丘陵地に大きく分けることができます。

奥羽山脈に含まれる地域は、大半が蔵王国定公園に指定されていて、高山帯、亜高山帯、山地帯を形成し、変化に富んだ豊かな自然環境を示しています。

東側を扇状地が占める山形盆地には県内でこの地域にしか生息していない貴重な植物も確認されています。

また、西側に位置する白鷹丘陵は白鷹火山のカルデラにみられる西部湖沼群を形成しており、その特質的な地形がゆえに貴重な動植物がたくさん生息しています。

このように、地形的にも気候的にも特徴のある環境の中にあり、山形市の里山は自然の宝庫と言えるのです。





④津金沢の大スギ 市民写真作品

①津金沢の大スギ（熊野神社）

地元の人が親しみを込めて「お熊ん様」と呼ぶ熊野神社のご神木です。山形県内有数のスギの巨木であり、市内では最も早く県の天然記念物指定を受けました。

高さは約35m、幹周りは10m近くにも達しますが、樹齢千年にも及ぶといわれており、かつては近くにもう1本、スギの巨木があったとされています。

近年は木の勢いにも衰えが見られ、地域のみなさんが願いを込めて保存活動に力を注いでいます。

フィールドワーク

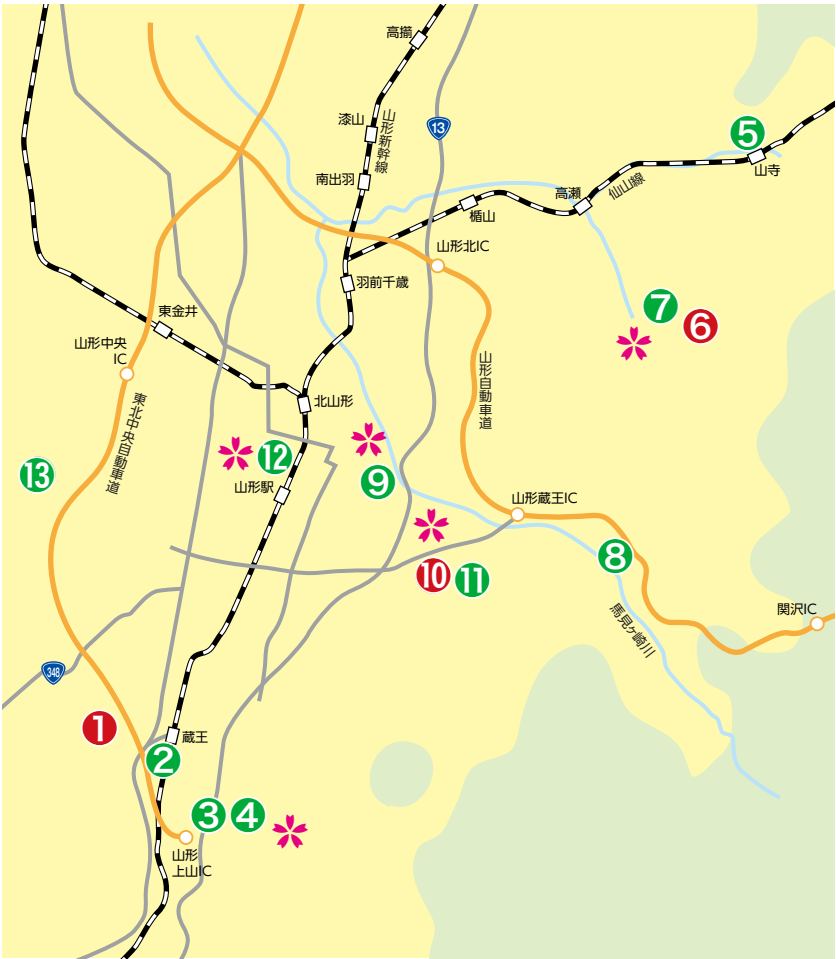
名木巡りをしよう

今でこそ老木古木と呼ばれる1本1本の木々。この木たちは、その木の周りで遊ぶ子どもたちを見守り、木の下に憩う人々を癒し、いったい、どれだけの人の営みを見守ってきたのでしょうか。そんなことを考えながら、名木を訪ね歩くのも楽しいものですね。その木がそこにある背景や歴史を知ると、「ふるさとやまがた」への思いはさらに大きく広がります。

樹木を觀賞するにあたっては、所有者や管理者に断ることはもちろんのこと、根を踏まない、枝を折らないなど、樹木の命への気遣いや周辺環境への配慮を忘れてはなりません。



山形市の名木と桜の名所



県指定天然記念物 …… ●
市指定天然記念物 …… ●
市内の桜の名所 …… ＊桜

②愛染神社の桜（松原）

老木種時桜とも言われるエドヒガンの老木です。この地は、かつて上山へ通じる山坂道の出入り口で行き交う人々の憩いの場でした。境内には他にも種々の老大木が残っています。



③松尾山のカツラ（蔵王半郷）

主幹は空洞化しており、途中から直上する枝が主幹状に伸び、25mの高さに達しています。この付近の溪流沿いに多くあったカツラの大木のうち、残された1本です。



④松尾山のヒガンザクラ（蔵王半郷）



最上三十三観音第九番札所の松尾院観音堂の前、参道の左側にあるエドヒガンの老木です。主幹は空洞化し、北側に斜めに張り出した若い一枝がわずかに枝葉を茂らせ毎年花を咲かせています。

⑤山寺の大イチョウ（日枝神社）



名勝史跡「山寺」の日枝神社境内にあるイチョウの雄株です。根元周りは約10mありますが、幹部は空洞となり一部欠損しています。樹形は損なわれましたが、木の勢いはなお旺盛です。

⑥高沢の開山スギ（清雲寺）



高さは約25m、上部はたこ足状に多くの枝に分かれており、日本海側に自生したウラズギ独特の樹形をしており、「さかさスギ」とも称されています。「開山」は、寺を開いたとされる一向上人の逸話に由来します。

⑦見滝寺のシダレザクラ（上東山）



本堂前の広場にある高さおよそ15mのベニシダレで樹形の均整がとれた名木です。多くの細い枝が垂れ下がり、たいへん美しい姿をしています。

⑧禅昌寺のヒガンザクラ（滑川）



禅昌寺の裏庭前面の高台にあるエドヒガンの巨木で、主幹は大きく北方へと傾いています。先端近くから生えた一枝が直上して繁茂し、基部近くからの若枝とともに余生を生きているかのようです。

⑨専称寺の大イチョウ（緑町）



最上義光ゆかりの名刹専称寺の境内にあるイチョウの雄株です。このイチョウの葉が散ると根雪になるとされ、俗に「雪降りイチョウ」とも言われてきました。

⑪平泉寺の桜（平清水）



山門外のシダレザクラは樹形よく均整がとれています。また、山門内のベニシダレは細枝が無数に垂れ下がり、花時の眺めはとても美しく、古来觀賞されてきた名木二株です。

⑫霞城の桜（霞城公園）



西側の土壁に残るエドヒガンの老木です。この老木は、すでに失われた山形城の歴史にまつわる「血染の桜」と同種同時代のものと推定されています。

ミニ知識 44

緑のありがたさ ～冷気の「にじみ出し現象」～

近年の研究で、公園緑地が天然のクーラーの役割を果たし周りを涼しくする働きをしていることが明らかになり、この現象は「にじみ出し現象」と呼ばれています。

霞城公園や薬師公園、もみじ公園、寺院・神社の鎮守の森などの周りは、実際に涼しさを感じます。温暖化現象の影響が懸念される今、緑のありがたさに、私たちはもっともっと目を向ける必要がありそうです。



⑩平清水のヒイラギ（平清水）



個人邸宅にあるヒイラギの古木であり、その高さは10mを超えます。ヒイラギは自生の北限をいわき市とする暖地性の常緑小高木で、古来庭木として広く植栽されていますが、県内でこうした老巨木は稀なことです。

⑬文殊様の夫婦杉（村木沢良向寺）



「若木の文殊様」で知られる文殊堂の参道にあり、二株が合わさって生じたスギの奇形木です。昔から夫婦合和の象徴として縁結びの信仰を集めています。

五感を通して自然を体験



自然と人間の共生



自然学習センター



本館の建物

フィールドワーク

いろいろな学習支援を行っています

- ◆環境学習のお手伝い
- ◆野外活動の支援
- ◆ボランティアの育成
- ◆自然の家少年団活動
- ◆キャンプやトレッキング
- ◆プラネタリウム(一般向けもあり)
- ◆植物や昆虫の標本展示や製作

少年自然の家を訪ねて

県民の森に位置する山形市少年自然の家は、標高約610m、今から数十万年前の造山活動でできた白鷹山(標高994m)をシンボルとする西部丘陵地帯にあり、大小13の湖沼群に囲まれています。

春は新緑、夏は冷涼な高原の風情、秋は紅葉、冬は白銀の世界と四季折々の顔を持ち、自然の成り立ちやその多様性について学ぶには最適の場と言えます。この豊かな環境を利用した子どもたちの野外体験活動の場として、昭和50年に市制施行85周年記念事業として建設計画が決定し、昭和54年7月にオープンしました。

その後、平成8年4月には一般市民も利用できる環境学習・生涯学習の場として、野外活動センターもスタートしました。

現在は、四季を問わず、小中学生の自然体験学習の場として利用されるだけでなく、散策やスポーツなど、市民の憩いの場としても親しまれており、年間約6万人を超える方々に幅広く利用されています。

野草園を訪ねて

山形市野草園は、「自然と人間の共生」をテーマに、市制施行100周年の記念事業の一環として、少年自然の家とは逆の市の東部、蔵王連峰の山形市側に整備され、平成5年4月に開園しました。施設は、総面積26.5haという広大な広さを持ち、ここでは、野草を中心にしながら、四季折々の植物が楽しめるように、管理育成、植栽、展示を行っています。その数は野草、樹木あわせて約1,000種に上ります。中にはヤマウグイスカグラやミヤマザクラなど分布上貴重な植物もみられます。

園内には自然学習センターがあり、野草園のガイドや自然に関する情報提供を行い、花と緑あふれるまちづくりのための啓発活動を行っています。また、園内はシンボルゾーン、自然ふれあいゾーン、観察ゾーン、いこいのゾーン、友好姉妹都市ゾーンに分かれおり、中でも自然ふれあいゾーンは野草園のメインエリアで、敷設された木歩道を歩いて、ミズバショウなど季節の草花を眺めながら、折々の自然の変化を楽しむことができます。

山形市野草園は、「自然と人間の共生」をテーマに、市制施行100周年の記念事業の一環として、少年自然の家とは逆の市の東部、蔵王連峰の山形市側に整備され、平成5年4月に開園しました。施設は、総面積26.5haという広大な広さを持ち、ここでは、野草を中心にしながら、四季折々の植物が楽しめるように、管理育成、植栽、展示を行っています。その数は野草、樹木あわせて約1,000種に上ります。中にはヤマウグイスカグラやミヤマザクラなど分布上貴重な植物もみられます。

ミニ知識 45

新種「ミヤマカスミザクラ」

平成24年、野草園内に自生するサクラのうちの1本が、新品種として「ミヤマカスミザクラ」と命名されました。野生のミヤマザクラとカスミザクラが自然交配したもので、園内に1本あるだけで、高さ約8メートル、推定樹齢は約30年。花びらの先が2つに割れているところはカスミザクラ、花軸の枝分かれが複数起きるところはミヤマザクラの特徴を受け継いでいます。



2つのサクラは学術的に、サクラ属のミヤマザクラ節とヤマザクラ節に分かれており、節を超えた交配は珍しいとのこと。

学名の「Cerasus x shikamae H. Ohba」は、発見者の志鎌節郎氏の貢献を讃えて贈られたものです。